

大学放浪記 (36)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授 再生可能エネルギー学部

本報では「オープンハウス、Open house」について述べる。そもそもオープンハウスとは何を言うのか。先ず始めに想像するのは家を開放すると言う意味と考えればよい。すなわち大学が何をしているのか、その教育、研究、社会連携、国際連携など、数々の多岐に亘る活動について見て貰うことである。特に高校生にとっては将来大学に進学を希望する際に、どの専門分野で何処の大学を受験し、将来どの様な職に就くかといった希望を叶える為の予備知識として、上記の事柄に加え、福利厚生施設、授業料を含めた予算的な見積もりと思惑、さらには自分の専門分野は適合していても学力がそれに見合っているかどうかとも問題になる。また卒業、修了したときにどのような資格が得られるのか、具体的には教員免許、あるいは測量士補、環境アセスメント、などについてはどうなのかなどである。いずれにしても、このイベントは大学進学を志す高校生、若者にとって十分な情報収集の場となる。日本の大学ではオープン・キャンパス (Open Campus) と一般に呼ばれている。出生率の低下に伴い、大学に進学する学生数も減少しつつ有り、大学に取っては規定の募集人数に満たない場合は大学の社会的ニーズとその役割を疑われる時代にもなりつつある。したがって大学が積極的に高校に出向き、大学がおこなっている活動を宣伝する必要がある。今でもその事態、状況に変わりはないが、益々その度合いは厳しくなっている。学部、大学によっては他大学との合併や相手大学の学部のひとつとしての廃止、合併を含む改組なども現実には成されているようである。高校への出前講義、オープン・キャンパスでの活動紹介、言うまでも無く国際学会や国内でも学会、シンポジウム、セミナー開催などの積極的な対応が評価を高める事は衆知である。さらにこのイベントのみならず平素からウェブサイトやホームページにアップロードして情報発信をするどりよくを学部、大学レベルで行っている必要がある。いわゆる良き人材の確保はもちろん、優秀で無くともある程度の学力、能力があれば大学が祖の学生にモチベーションを高める努力、支援を行う事が重要、かつ必要である。このような対応によって大学のネームバリューも上がり、ランキングも上昇する。その効果として多くの学生を呼びこむことができる。しかし、そうまでして大学を目指してきた学生の多くが、入学後殆ど勉強せず(筆者の個人的見方)講義に出席するだけというルーチンワークで毎日を過ごしているのは理解に苦しむ。おそらく所定の単位を取得すれば、合格と成り将来が約束されると信じているのであろう。全くの大きな誤解である。卒業に必要な総単位数の取得は選んだ学科、コースを卒業するには必修であるが、かといって就職や将来迄もが保証されたわけではない。就職を含む将来の人生を考えると、何をすべきかと自分で考え、成すべき事を自ら探すと言う姿勢の学生は余りにも少ない。タイでは未だ所定の年月で操業できる学生が100%では無いと聞すが、日本ではほぼ100%、何某かの特別な事情が

無い限り卒業できると言うところがいくらかタイの大学との相違である。筆者が常に言っていることは、自分の存在に誇りと尊厳を持つ学生が余りにも少ない事である。大人も大半が現在はそうしたアイデンティティになって居てかつての日本人魂はどこかに忘れられている。しかしながら日本からは毎年のようにノーベル賞受賞者が出ていることは嬉しくほほ笑ましいことである。タイの学生にも知りうる学生のいくらかには、常にこの事を強調している。すなわち、農業技術も沢山タイに入ってきているが、タイ自身のオリジナルなものがあるかと言えば、殆ど無いというのがタイの大学の先生の話で有り、筆者もそれには同感である。タイ・オリジナルがなければ、未来永劫他国の技術や製品を購入し続けなくてはならない。それは単に学術論文を沢山増産していることではない。学術論文の価値、評価はその独創性（オリジナリティ）にある。もちろんその他の要素もあるが大部分の評価はこのオリジナリティで決まる。独創的研究は多くの知識や経験、年月を必要とするが研究者や技術者の考え方がまずは最も大切である。やる気の無い技術者や科学者がいくら多く集まっても意味はない。国家観、価値観を同じにする同志が集まってこそ成果の高い結果を生み出すことができる。業績数（刊行掲載論文数）だけでは勉強の域を出ることはできない。とくに学祭的知識を必要とする現代では、狭い専門分野のみの修得では使い物にならない。少なくとも自らの専門分野以外に2～3の他分野についてもある程度の情報共有、コミュニケーションができる程度の知識、能力を求められるのが現代である。しかもそれら2～の他分野知識も常にアップデートされる必要がある。そうしたことを入学時に心に刻ませる教育が欠落している。だから大学に入ることが最終目標になってしまうのである。だから卒業時期になっても就職が内定している学生は少ないし、運良く採用されても、早々と退職、転職するのが一般的にさえ見える。何に興味があるのか、関心があるのか、問いかけても応答もないのでは大学に来た目的もはっきりしない。自分の人生を如何に生きるかと言う事に対する「教育」が大学では全く成されていないからと言うのはいささか間違った見方であろうか。大学が教育研究を通じて人材育成を施す場所である事を考えれば、単に学術的知識の供与、供給だけでは人格形成に不十分である事は論を待たない。

大学に入学してどの様な人生を夢見て居るのか、強い、また高い好奇心で見ているがその希望的観測はむなしく消えていくのがこれまでの筆者の日々であった。もちろん筆者の「志」に動かされ、心を動かしたかつての学生も居るが、教育の成果が出るには長い年月を要する。それに加えて、「志」に理解を示してもその人物が必ずしも成功する、あるいは思った通りの最終ゴールに到達するかどうかの保証はない。教える側も一生懸命努力し、学ぶ側も同様に一生懸命努力する姿勢が双方に無ければ効果は少ないし、大学に取っても、また学生にとっても目に見える進展は双方に見ることはできない。大学人の意識改革が極めて重要であることをここであらためて再確認の意味で強調しておく。オープンハウスの日時がアナウンスされた為か、当日は多くの観光バスが大学のキャンパスに停車して、未来の大学生を運んでくる。彼らがどの様な視点でこのイベントに参加しようと思ってやってきたのかは分からないが、彼らなりに胸に秘めた夢があると信じたい。その考えや夢が果たしてどの程度

のものか、誰も分からない。こんな時に適切なガイダンスやアドバイスができる教員または職員、或いは大学関係者が居れば大助かりであるが、その実態も分からない。大学に入学してからもそうした機会を持つこと無く、システムティックに必修科目と、選択科目を規定の範囲で取得して卒業して行くのでは余りにも寂しく情けない。大学在学中にさらにモチベーションを上げ、生きるべき方向を見いだす事が出来るほどの助言をする事が出来る教員は極めて少ないのではないかと推察する。いわゆる人の心を動かすほどの影響力を見せる事が出来る教員も極めて少ない。今だけ、金だけ、自分だけと言うわがままな考えを有する人材が増加する現在、人のためなどと考える程の大志を有する教員は極めて少ないと思われる。もちろん教える側が如何に尽力しても、教わる側がそれを理解し、その気に真剣にならないければ意味はない。

以下の写真はオープンハウスで集まった見学希望者達であるが、このうちのどれだけが高い「志」とそれに立ち向かう高いモチベーションを持ち合わせているかが、楽しみになるか失望になるか、を見極めるべくじっと我慢の毎日である。



再生可能エネルギー学部へ押し寄せたオープンハウス見学希望の参加者達（上下）。



見学希望者を待ち受ける各種ポスターや建物の写真（上）

<余録>

下の写真は誰が置いたのか、定期的に男子便所の便器に置いてる観葉植物である。定期的
に置いてあるのを見かけることから、管理者がいる事は確かであり、極めて直接的な液肥の
施肥法である。

